

各年齢層における福祉的アプローチ方法について

日本社会事業大学 社大福祉ネットワーク学生部2年

大竹結花・尾島ありさ・工藤凌聖・河野志保
砂川佳毅・福田寛和・丸山純平

1. はじめに

2016年6月、厚生労働省は「地域共生社会」の推進本部を設置した。

地域共生社会とは、制度・分野などの「縦割り」や「支え手」「受け手」という関係を超え、地域住民や地域の多様な主体が「わがごと」として参画し、人と人、人と資源とが世代分野を超えて「丸ごと」つながることで、住民の1人ひとりの暮らしと生きがい、地域をとともに創っていく社会である、と言われており、地域を基盤とした包括的な支援体制の実現を目指していくものである。

これまでの福祉サービスは、対象者ごとに考えられる主なニーズに合わせ、専門的なサービスを提供するというかたちで発展してきた。しかし近年、家族のかたちやライフスタイルが多様化したり、地域社会が変化したりといったことにより、現在の福祉サービスではまかないきれない課題が生じるようになった。具体的には、複合的な課題を抱える家庭への支援や、制度での支援が薄い青年期で抱える課題に対する支援など、「制度の狭間」と呼ばれるものが挙げられる。

このような社会の状況のなか、福祉の新たなかたちとして「地域共生社会」という考えが生まれたのである。

このような地域共生社会の実現に向けての改革工程の中に書かれている検討事項に「地域保健の推進における市町村の機能の強化」というのがある。

具体的には、福祉分野と連携した総合相談機能の整備、がんや難病を専門とする相談機能との連携、地域活動の推進・育成などが挙げられている。

今回の社大福祉ネットワークの自主企画では、この福祉分野と連携した総合相談機能の整備とい

うところに注目し、総合相談窓口が市役所に置かれ、自分が窓口の職員になった場合を想定し、事例検討と意見の共有を行った。

2. 自主企画内容

先述したように、総合相談窓口が市役所に置かれ、自分が窓口の職員になった場合、多分野の相談にどのように対応するか、どのような社会資源と連携・活用できるかという視点で3つの事例検討を行った。

事例としては、下記のものである。

① 高齢者に関する事例

Aさん(77歳)。男性。一人暮らしをしている。認知機能に特に問題はないが、老人性難聴で、コミュニケーションがとりづらい。また、昔たばこを多く吸っていたことで、下肢の閉塞性動脈硬化症を患っている。そのため、少し歩くと足の痛みを感じるので、必要最低限の行動しかしていない。

山登りが趣味だったが、最近は引きこもりがちになっている。それにより、近所の人との関わりも希薄化しているようだ。

郊外に住んでいる息子夫婦が月に1度様子を見に来ており、買い物をしたりゴミを捨てたりといった身の回りの世話をしている。

② 青年期の精神障がい者に関する事例

Bさん(26歳)。男性。軽度の知的障害を持っている。両親と同居しており、日中は作業所に通っている。同じ作業所の女性と交際中で、共に暮らすことを望んでいる。

ADLは自立しているが、普段の生活の家事は家族が行っているため、生活が成り立たないのではないかという点で、母親は自立に

反対している。

Bさんは作業所では、見本を見せれば問題なく作業が行えているため、ワーカーは家事も問題なくできるのではないかと感じている。

③ 児童とその家族に関する事例

Cちゃん（7歳）。小学1年生。両親はCちゃんが入学するときに離婚し、母親と2人暮らしをしている。近くに親戚は住んでおらず、引っ越してきたばかりである。母親は看護師をしており、勤務が不規則。学童保育に通ってはいるが、帰宅後に一人で過ごすこともあるようだ。

近所の人からは、「子どもが一人で買い物に行っている」「よく、叱る声や泣き声が聞こえてくる」という話もでている。

最近、授業中に寝ることや学校を休むことが多くなってきており、Cちゃんに親しい友達も見られないため、学校や学童保育でも心配されている。

3. 事例検討内容

2. 自主企画内容に示した3つの事例を用いてディスカッションを行った。事例ごとに考えられた支援方法や連携できる機関、活用できるのではないかと考えられる社会資源として挙げられたものをここでは記載する。

また形式としては、参加者を2グループに分け、各グループごとにKJ法を用いて意見の交換と分類を行ってもらい、それを事例ごとに全体で共有した。

まず①の事例では、下記のようなものが提案された。

- ・介護保険を申請する
- ・コミュニケーション能力が低下していることから補聴器、ホワイトボードの使用を勧める
- ・下肢の閉塞性動脈硬化症の治療のため、運動療法（歩く）を勧める
- ・地域のコミュニティカフェへ行くことや体を

動かせるような地域活動を勧める

- ・週に何度かヘルパーに入ってもらうことで、家事などの身の回りのことの負担を減らすとともに、見守りをしてもらう
- ・近くのデイサービスに通うことを勧め、外出の機会をつくる
- ・地域の子どもと関われる機会を設ける

挙げられた支援方法をみると、主に医療的ケア・外出支援・日常生活への支援の3種類に分類ができる。

医療的ケアは、運動療法などのリハビリと補聴器の利用が当てはまる。これは、病院など医療機関やリハビリセンター、場合によってはデイケアのような通所リハビリテーションとの連携が必要となるだろう。

外出支援は、コミュニティカフェや地域活動を勧めること、またデイサービスに通うことや地域の子どもと関わる機会を設けるというものが当てはまるだろう。地域活動に参加することで生活に刺激も生まれ、いざという時の見守り体制も自然と発生させることが可能になる。

日常生活への支援には、ホワイトボードの利用によるコミュニケーション方法を作ることやヘルパー派遣が当てはまる。息子夫婦が月に1度の訪問であるため、日常生活の支援は欠かせないものであるだろう。

これらの支援方法から、どのような機関と連携する必要があるか考えたところ、社会福祉協議会、医療機関、近隣の介護サービスを提供しているNPO団体や社会福祉法人・事業所、地域で活動を行っている市民団体などが挙げられた。

次に②の事例では、下記のようなものが提案された。

- ・自立生活を行う上での母親の不安を軽減させるために、まずは知的障がい者向けのグループホームに入る
- ・家事や日常生活の自立訓練を行う
- ・療育手帳で使えるサービスを受ける

- ・就労支援継続 a 型の事業所や、一般企業の障がい者雇用枠での採用を目指す
- ・ショートステイなどを通して、自立生活を行う上での課題を見つける
- ・Bさんが家事に慣れるまで、ヘルパーの派遣を依頼する

挙げられた支援方法を分類すると、母親の不安要素となっている家事をサポートする支援と、その後の自立生活につなげるための支援に分けられる。ショートステイやグループホームでの生活を通し、本人と家族が自立生活への不安感を軽減させたり自信をつけてもらったりすることで、家族からの理解を得ることが今後の生活を行う上でも重要になるのではないかと考えた。また、Bさんは交際相手との生活を望んでいるため、女性への支援も同様に必要である。

連携することが考えられる機関としては、就労支援施設、一人暮らしをサポートしている事業所、知的障がい者への支援を行っているグループホーム、自立支援を行っている事業所、二人が現在通っている作業所などが挙げられた。

最後に③の事例では、下記のような支援が提案された。

- ・家事や育児の支援を行ってくれるサービスの利用
- ・民生児童委員などが訪問することなどで近隣住民の見守り体制を強化する
- ・児童相談所へ相談
- ・地域とのつながりをつくるため、子育てサークルなどに参加することを勧める
- ・子ども食堂などの存在を伝え、参加を促す

挙げられた支援方法を分類すると、主に日常生活支援とAちゃんと母親の精神的な支援、見守り体制の強化というように分けられる。

連携することが考えられる機関としては、児童相談所、民生委員、学校、学童保育、家事・育児

支援などを行っている団体、子育てサークル等市民団体などが挙げられた。

4. 企画の分析

自主企画へ参加していただいた学生にアンケート調査を行った。回収できたものから、企画の分析を行う。

アンケート内容は、以下のものである。

1. 本日の企画のテーマに興味がありましたか

- ①あった
- ②どちらかと言えばあった
- ③どちらでもない
- ④どちらかと言えばなかった
- ⑤なかった

2. 企画の難易度はいかがでしたか

- ①易しかった
- ②どちらかと言えば易しかった
- ③どちらでもない
- ④どちらかと言えば難しかった
- ⑤難しかった

3. 企画の満足度について

- ①とても満足
- ②どちらかと言えば満足
- ③どちらでもない
- ④どちらかと言えば不満足
- ⑤不満足

4. 本日の企画によって新たに知ったことなどはありましたか

5. 全体を通しての感想・意見等がありましたらお書き下さい

企画テーマに興味があったかという問いには、参加者の約9割の人が「興味があった」もしくは「どちらかといえば興味があった」と回答している。近年、様々な分野で地域共生社会の推進がいわれるようになってきていることと、同時刻に地域共生社会についての企画も行っていたことから、学生の関心も比較的高いのではないかと考えられる。

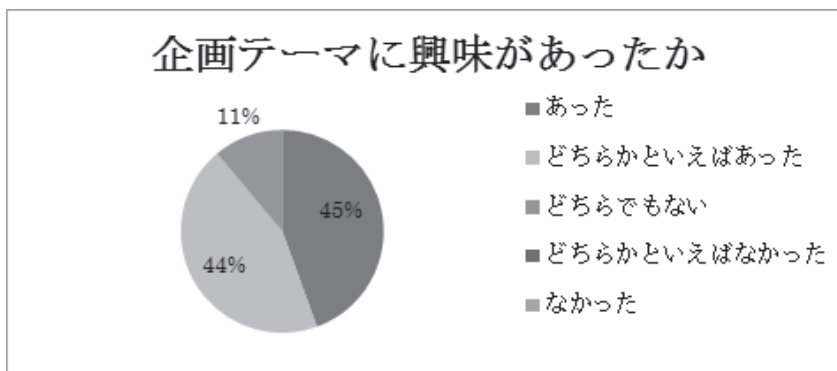


図1 企画テーマに興味があったか

企画の難易度についての結果は以下の通りである。「どちらかといえば難しかった」「難しかった」と回答している人が約8割いた。これは、事例の対象が多岐に渡ったことと、「地域共生社会」に

対する説明が不十分だったことが考えられる。特に、連携することが考えられる機関を挙げるためには、各機関の役割についての説明を重視する必要があるだろう。

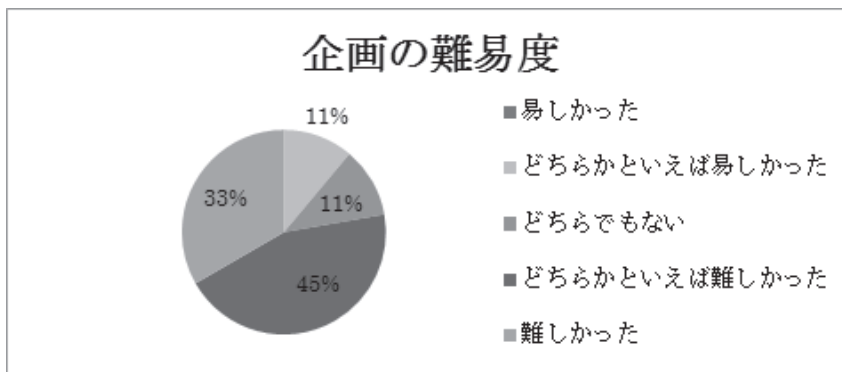


図2 企画の難易度

企画の満足度では、アンケートに回答した学生全員から「とても満足」もしくは「どちらかといえば満足」という回答をいただいた。自由記述の問いにも書かれていたが、企画の趣旨であった包

括的な支援を行うための連携の重要性や多分野の知識を学ぶ重要性をある程度は伝えられたようであったため、企画の意義を感じられた。

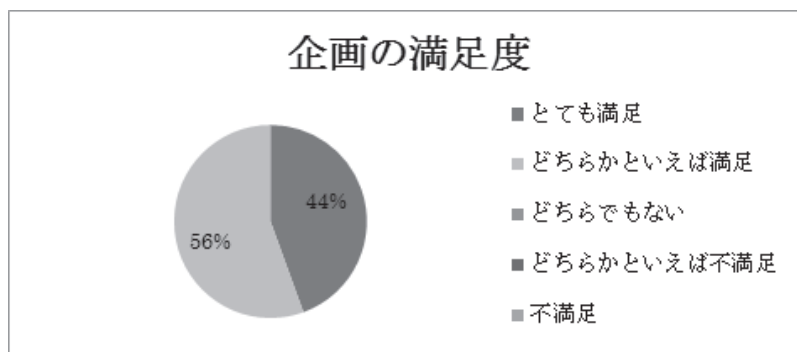


図3 企画の満足度

5. おわりに

企画を行っていくなかで、自分自身「地域共生社会」の推進の必要性とその難しさを強く感じた。前述したように、現代社会には既存の福祉制度ではこぼれ落ちてしまう課題が増加してきている。課題が多様化・複雑化している中では、支援も個々の状況に合わせたものでなくてはならない。これ

からの福祉職には、多様な知識と経験、様々な機関との連携を円滑に行える能力が求められるのではないかと考える。

自身の知識不足も強く感じたため、企画の反省点とも照らし合わせながら学びを深めていきたい。